

学位請求論文審査報告要旨

2014 年 2 月 12 日

申請者 根本 愛子

論文題目 日本語学習動機におけるポップカルチャーの役割
——カタルを事例とした量的および質的研究——

論文審査委員 イ ヨンスク

西谷 まり

木下 康仁

1. 本論文の内容と構成

ここ数年来、政府関係機関が推し進めている「クールジャパン」と呼ばれる文化政策のなかでは、海外における日本のポップカルチャーの人気の日本語学習者の増加につながることを期待されている。しかし、日本のポップカルチャーに興味をもつ者がどのようにして日本語学習を始めるのかという点については、実証的な調査はほとんどない。本論文は、海外の日本語学習者等を対象にしたアンケート調査を基にして、日本のポップカルチャーへの興味と日本語学習の動機付けがどのような関係にあるかを実証的に明らかにするとともに、「クールジャパン」という文化政策の有効性を日本語教育の側から検証することを目的としている。本論文の構成は以下の通りである。

第1章 本論文の概要

第1節 本論文の背景と目的

第2節 本論文の構成

第3節 動機づけ研究のまとめ

第4節 ポップカルチャーとクールジャパン

第2章 関係政策からみる海外の日本語学習者

第1節 戦後の海外における日本語教育の先行研究

第2節 経済・技術の援助・協力の時代

第3節 技術・経済協力から国際交流への移行期

第4節 国際交流の時代

第5節 クールジャパンの到来

第3章 調査・研究からみる海外の日本語学習者

第1節 大規模調査の中の海外の日本語学習者

第2節 海外の日本語学習動機に関する先行研究

- 第3節 これまでの調査・研究における問題点
- 第4章 調査の設計
 - 第1節 量的研究と質的研究：説明的デザイン
 - 第2節 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ
- 第5章 調査対象の概要
 - 第1節 調査対象の設定
 - 第2節 カタールにおける日本語教育の概要
 - 第3節 カタール教育省語学教育センター（LTI）の日本語講座
 - 第4節 カタール大学 The Japanese Club (QUJC)
 - 第5節 調査の限界
- 第6章 LTI 受講生と QUJC 学生の差
 - 第1節 カタールにおけるアンケート調査——LTI 受講生と QUJC 学生の比較
 - 第2節 中東 3 か国におけるアンケート調査
 - 第3節 インタビュー調査に向けて
- 第7章 QUJC 学生が日本語学習の（不）必要性を認識するプロセス
 - 第1節 調査の概要
 - 第2節 分析結果の概要
 - 第3節 懐かしい思い出
 - 第4節 興味の発展
 - 第5節 日本語の看板を背負う
 - 第6節 日本語学習の必要性のにんしきへ
 - 第7節 日本語学習の必要性の認識するプロセスにはなかった概念
 - 第8節 QUJC 学生の日本語学習におけるポップカルチャーの役割
- 第8章 LTI 修了生の日本語学習動機のプロセス
 - 第1節 調査の概要
 - 第2節 分析結果の概要
 - 第3節 言語学習への興味
 - 第4節 日本語学習開始までの「日本への興味」
 - 第5節 日本語学習の開始の決心
 - 第6節 日本語学習開始以降の「日本への興味」
 - 第7節 諦めと割り切り
 - 第8節 頑張れる理由
 - 第9節 日本語学習動機のプロセスにはなかった概念
 - 第10節 LTI 修了生の日本語学習動機におけるポップカルチャーの役割
- 第9章 ポップカルチャーを日本語学習動機とするために必要な要員
 - 第1節 日本語学習の開始とポップカルチャー

第2節 日本語学習の継続とポップカルチャー

第3節 海外の日本語学習動機をポップカルチャーとする際の問題点

第4節 「日本語教師」ができること

参考文献／参考資料／参考記事

添付資料

2, 本論文の概要

第 1 章では、本論文の背景と目的が整理された後、論文の構成、言語教育における学習動機理論の概要、本論文の軸となる「ポップカルチャー」と「クールジャパン」という用語の定義が述べられる。

第 2 章では、海外の日本語教育に対する政策の方向と内容、想定された学習者像をそれぞれの時代別にまとめ、そのなかから 21 世紀に入って「ポップカルチャー」に注目が集まるようになった過程を追っている。初期には経済援助や技術協力が目的であったが、それが次第に海外での「日本理解」の育成へと移行し、さらにそうした方向が「国際交流」へと発展すると、情報発信の必要性が強調されるようになる。その一方で学習者の多様化が進み、想定される学習者のイメージが曖昧になる。しかし、2002 年の McGray の論文に「クールジャパン」という用語が登場したことにより、「ポップカルチャーに興味をもつ者」が日本語学習者の予備軍として想定されることとなる。

第 3 章では、これまでに実施された海外の日本語教育に関する調査・研究の流れが述べられる。国際交流基金などの調査では、1980 年代末まで機関数や学習者数の報告がなされるだけであり、学習者の動機については触れられていない。その後の量的調査においては、想定された範囲から外れる学習動機が採り上げられていない。また、質的調査においても、「特定の機関で日本語を学習している者」だけが対象とされ、それ以外の学習者が念頭におかれていない、等々の問題点がある。

第 4 章では、本論文で実施された調査の設計が提示され、量的調査と質的調査を併用する「混合研究法」をとることが述べられる。さらに、質的調査として、修正版グランウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を採用し、その考え方、手順、分析例が紹介されている。

第 5 章は、調査対象についての説明である。ひとつは、カタル教育省附属語学教育センター (Language Teaching Institute=LTI) の日本語講座の受講生であり、もうひとつは、カタル大学 The Japanese Club (QUJC) の所属学生である。それぞれの背景が示され、ポップカルチャーに興味をもつ者は後者の QUJC に集まっていることが確認される。

第 6 章では、量的方法を用いた調査の結果が報告される。質問紙調査により、LTI 受講生には日本語学習動機、QUJC 学生には日本への興味関心を調査した。それによると、両者の同質性とともに、それぞれのグループの特徴が引き出され、日本語学習動機と日本への興味関心が必ずしも一致しないことが明らかとなった。

第7章では、QUJC 学生へのインタビュー調査をもとにして、M-GTA による分析を通して彼らの日本語学習への認識のプロセスが解明される。それによると、「懐かしい思い出」→「興味の広がり」→「日本語の看板」→「将来を夢見る」というプロセスが典型として抽出された。そして、QUJC の学生は日本語学習の必要性を認識しているものの、それをただちに実行に移すまでには至っていないことが明らかとなった。

第8章では、LTI 修了生によるインタビュー調査から、LTI 修了生の日本語学習動機が調べられる。それによると、LTI 修了生の日本語学習動機のプロセスには、英語力と年上の家族の存在が深く関わっていること、LTI 修了生の日本語学習動機とポップカルチャーとの関係は複合的であり、ポップカルチャーへの興味だけが学習動機を引き起こすものではないこと、が明らかとなった。

第9章では、QUJC 学生と LTI 修了生のそれぞれの学習動機形成プロセスを比較し、ポップカルチャーが日本語学習の開始動機ないし継続動機となるための要因が抽出される。その結果、現在のクールジャパン政策で獲得すべきとされる「日本語学習者」のイメージが曖昧であり、それは海外の日本語教育が日本からの情報を一方向的に「発信」することに重きをおいていたためであると著者は述べる。そして、これからは学習者ないし学習者予備軍の意識や動機付けを丁寧に「受信」という作業が求められると指摘する。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、日本語学習動機に焦点をあてた研究は数多いが、日本語を学習しない動機、しかもポップカルチャーとの関係を論じたものはほとんどなく、研究の方向性と目的に独創性がある。そして、量的及び質的調査の手順がセオリーにのっとりたものであり、日本のアニメと漫画から日本語学習者が増えていると漠然と認識していた日本語教師やクールジャパン政策立案者に新たな角度からの考察を提示した点が大きく評価できる。

第二に、ポップカルチャーの誘因効果を含めた日本語学習推進に関するこれまでの政策展開を批判的にレビューしたうえで、日本語講座修了者のグループと日本文化に関心をもつグループを対象に、質的研究法のひとつである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて彼ら／彼女らの経験を詳細なインタビューによりデータ化して体系的な分析を行い、説明モデルにまとめた点は高く評価できる。当事者を対象とする本研究のアプローチは日本語学習に関する研究において先駆的である。質的研究、なかんずく M-GTA の採用は目的に照らして適切であり、分析も十分な水準に達しており、当事者の複雑な経験をモデルとして可視化できている。

第三には、インタビューデータの分析の緻密さが挙げられる。そのことは、論文に添付された分析ワークシート（M-GTA で用いるフォーマット）の内容からも確認できる。とくに、データから説明概念を生成する際に、さまざまな解釈可能性や解釈上の疑問などを記録する「理論的メモ」欄に著者の思考プロセスが詳細に記載されており、分析プロセス全

体が明示されている。これにより、解釈の恣意的偏りが生じないように、データの比較分析がていねいに進められたことが確認できる。

第四に、M-GTA はデータに密着した質的分析方法であり、当然分析結果はデータの解釈から導かれるのであるが、本論文ではそれぞれの分析結果を受けて第 7 章第 7 節「日本語学習の必要性の認識プロセスにはなかった概念」および第 8 章第 9 節「日本語学習動機のプロセスにはなかった概念」で、従来の推進政策からすれば予想される概念が、データの分析からは生成されなかった点を論じている。これは政策的に想定されている学習者像と実態がずれていることを示しており、実践への重要な示唆となる。また、こうした視点は、M-GTA による分析においてこれまでに十分明示されてこなかったものであり、この分析方法を補完する本論文独自の貢献と言える。

第五に、比重は質的研究法におかれているが、量的研究法においても、因子分析を丁寧に行って因子を抽出し、分散分析と多重比較を行って量的な分析をきちんと行っており信頼性のある結果を導き出している。数量的研究法を組みこんだ *mixed methods* の採用もこの研究領域における研究法の確立に向けた試みとして評価できる。

問題点としては以下の点が挙げられる。

まず、カタールのデータだけでは分析の厚みに欠けるという理由から、トルコとバーレーンでの調査結果を加えたが、この両者とも教育機関に通う日本語学習者のものであり、ポップカルチャーに関心はあるが日本語を学習しない群については採り上げられていない。この点で、一方でカタール、他方でトルコとバーレーンのデータに偏りが見られるのは残念である。

また、本論文は LTI と QUJC のふたつのグループを対象に調査分析を行ったものであるが、結果の一般化可能性に関してもう少し慎重な検討が必要であったと思われる。M-GTA は分析結果をモデルの形にまとめる質的研究法であるが、その目的には、人間の社会的相互作用に関する実践領域に研究成果を還元することが含まれている。したがって、本論文の結果が日本語教育に関するどのような場とプログラム／機会において、どのような形で参考にでき活用可能なのかを最後に踏み込んで論じるとよかった。しかし、これは本論文の欠陥というよりも、ここでの成果をさらに発展させるためであり、学習当事者の声を「受信」する重要性を指摘し、その受信者の役割を、学生と直接接する日本語教師に期待するところまで提唱しているので、この課題には取り組みやすいであろう。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終試験結果の要旨

2014 年 2 月 12 日

論文審査委員

イ ヨンスク

西谷 まり

木下 康仁

2014 年 1 月 24 日、学位請求論文提出者 根本愛子 氏の論文「日本語学習動機におけるポップカルチャーの役割——カタルを事例とした量的および質的研究」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、根本愛子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、根本愛子 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。